

2019 年度 教育・研究年報

目 次

教育・研究年報

- 一般教養・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
- 基礎看護学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
- 成人看護学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
- 老年看護学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
- 母性看護学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16
- 小児看護学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19
- 精神看護学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
- 地域看護学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
- 在宅看護学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27

外部資金獲得状況

- 外部資金獲得状況一覧・・・・・・・・・・・・・・・・ 29

2019年度 一般教養領域活動報告

1. 領域構成

清水哲郎（教授）、砂山稔（教授）、相澤出（講師）、大井慈郎（特任講師）

2. 一般教養領域における教育に関する内容と評価

2019年度、一般教養領域教員が担当した講義等に関する教育内容および評価については以下のとおりである。

2019年度は、清水教授は「探求の基礎」（1学年）、「看護倫理」（2学年、濱中教授、石井講師と共同）、「人間の生と死」（2学年）、「エンドオブライフケア論」（濱中教授、大越教授、石井講師と共同）を担当した。これら4科目の清水担当部分について共通のテキスト試行版『看護学生のための哲学・倫理学・死生学 2019年試行版』を作成し、これを使った授業を実施してテキストの有効性を調べたが、学生にとってはこのようなテキストがあることは学修のために有効であることは確かである。なお、改善の余地が大きく次年度に向けて改訂をしている。

相澤講師は、講義に関しては今年度、一年生を対象とした基礎科目「地域の文化」（前期、必修）「人間と文化」（後期、必修）、専門基礎科目「ボランティア論」（後期、選択）、二年生を対象とした基礎科目「家族という社会」（前期、必修）、専門基礎科目「チーム医療論」（後期、必修）、三年生を対象とした基礎科目「社会と福祉」（前期、必修）を担当した。一般教養という位置づけではあるものの、各科目の内容は、看護学のさまざまな論点と直結しているものばかりである。そのため、講義担当者としては、これらの科目も準専門科目として意識し、他の看護学の講義との関連を学生に意識づけしつつ、講義を実施した。講義の他、一年生を対象とした基礎ゼミナール（通年、必修）も担当した。ゼミナールにおいては、大学において初めてゼミナールでの教育を経験する学生たちに対して、基本的な文献の輪読、レポートの作成と報告を課題としながら、ゼミナールの運営を行った。ゼミナールでは基本的に全員が、毎回テキストのいずれかの部分を担当し、報告する形式をとった。これによって、大学における基礎学力の向上を図り、その成果が期末には見出された。

大井特任講師は「情報処理」（1年）、「調査と統計」（3年）、「看護研究方法論」（3年）を担当した。「情報処理」は、大学生として必要な情報リテラシーの理解やアカデミックスキルなどを学習するものである。本年度は論文の剽窃などへの注意喚起のため、引用・文献リストの作成法について昨年度以上に時間を割いた。今後はSNSトラブルの事例紹介を増加させたい。「調査と統計」は、保健医療の場や看護研究において必要となる統計学の基礎知識を学び、統計資料を理解し調査・分析を遂行する力を身につけるものである。学生が各種調査方法を実際に体験することに注力した授業展開を図った。「看護研究方法論」は、

看護学発展の基礎となる研究の意義を理解するものであり、量的研究（全5回）を担当した。「調査と統計」と同じ教員が担当することにより、2つの授業を関連させながら展開することができた。

3. 一般教養領域における研究に関する内容と評価

2019年度は、清水教授は科学研究費助成事業 基盤研究(A)（課題番号 18H03572）2年目の研究活動を行った。

- ・ 前年度に続けて、臨床倫理の検討システムおよび本人・家族の意思決定支援の研究開発を行った。厚生労働省「人生の最終段階における医療・ケアの決定プロセスに関するガイドライン」の考え方が本研究が提唱するシステムに近いことを提示し、日本における超高齢社会の医療・ケアの質の向上に結び付ける方向で啓発活動等も行った。
- ・ 研究成果を本学の教育カリキュラムに活かす方途の研究開発（倫理関係授業の総合的テキストの改訂と第一版刊行）を続けた。
- ・ 研究成果の臨床現場への還元として、臨床倫理セミナーの開催、医療・看護・介護関係諸団体の臨床倫理研修・ACP相談員養成研修等への協力、日本医師会生命倫理懇談会における意見具申。
- ・ 研究成果の発表として、学会招待講演や公募シンポジウムにおける発表等。

砂山教授は、白居易の友人で、唐代の代表的な文人の一人である元稹と道教の関係を考察した論文を執筆、ほぼ完成段階にある。今後は白居易と道教に関する二論文を執筆する予定である。また、これらの論文と従来諸論文等を収録した研究書『連昌と華清』（仮題）を構想しており、近年中の出版を計画している。

相澤講師は、以前から継続している地域包括ケアの現場レベルでの調査研究、とくに在宅医療の現場でのフィールドワークを中心とした、地域医療・地域福祉の調査研究を進めた。主なフィールドとしたのは、宮城県登米市、宮城県名取市、秋田県能代市である。これらの研究は、科研「臨床倫理システムの哲学的展開と超高齢社会への貢献および医療者養成課程への組み込み」（基盤研究(A)、課題番号 18H03572、代表者：清水哲郎。研究分担者として参加）および国立民族学博物館研究プロジェクト（共同研究）「現代日本における「看取り文化」の再構築に関する人類学的研究」（代表者：浮ヶ谷幸代、館外研究員として参加）の一環でもある。この調査研究の成果として、論文一本、学会報告一件がある。このほかに、科研「東北地方における女子ミッション教育の戦後史」（基盤研究(C)、課題番号 17K04570、研究代表者：片瀬一男）の研究協力者として、近代日本における女子ミッション教育の歴史社会学的研究の遂行に継続して関わっており、今年度は学会報告、論文掲載というかたちでその成果を出すことが出来た。さらに、公益財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団 2018年度 一般公募【研究】「高齢者の腹膜透析における看護小規模多機能

型居宅介護サービスの活用」(研究代表：遠藤和子)に共同研究メンバーとして参加し、看護師、介護職を対象とした、腹膜透析に関する教育プログラム開発のための研究に参加し、在宅医療の現場での聞き取り調査等に従事した。

大井特任講師は科学研究費助成事業等の競争的資金を得、また地方公共団体との協働事業参加等により、次のような研究活動を行った。

- ・科学研究費助成事業若手研究(B)(課題番号 17K13838 代表者：大井慈郎)による、インドネシアジャカルタにおける現地調査(関連してインドネシア大学客員研究員を継続している)。研究成果の一部は、ジャカルタ郊外の労働者に関する学会発表として公表。
- ・科学研究費助成事業 基盤研究(B)(課題番号 16H03319 代表者：内藤耕)による、インドネシアカラワンにおける農村の変容に関する現地調査。調査結果の一部を査読論文として公表した。
- ・介護予防事業研究(東北大学教員等と協働)にて、宮城県富谷市保健福祉部長寿福祉課と連携し、各地域にて実施されている高齢者サロンへの訪問調査を実施。
- ・盛岡市内にて、町内会の閉じこもり防止活動(主に高齢者対象)に年間を通じた参与観察を実施。

【著書】

- 1) 大井慈郎, 2019「途上国における社会運動—開発独裁体制後の展開の可能性」長谷川公一編『社会運動の現在—市民社会の声』有斐閣。(分担執筆：第10章, p208-229.)

【論文】

- 1) 清水哲郎:自己決定から共同決定へ—現実の本人・家族を踏まえた理論への歩み, 単著, 患者安全推進ジャーナル(日本医療機能評価機構 認定病院患者安全推進協議会) 56, 2019. p10-16.
- 2) 清水哲郎:「看取り」と「終活」—本人にとっての最善を目指して, 単著, ナーシング・ビジネス 13-9(181), 2019. p38-42.
- 3) 清水哲郎:生命を巡る倫理と対人援助, 単著, ソーシャルワーク研究 45-3(179), 2019. p189-204.
- 4) 相澤出:特別養護老人ホームと自宅での看取り、そしてホームカミング—地域への問題提起としての看取りをめぐるケア, 単著, 文化人類学 84(3), 2019. p295-313. (査読有)(招待)

- 5) 片瀬一男・相澤出・遠藤恵子：戦後日本社会における女性たちの「もうひとつの」個人主義-宮城学院同窓生の生活史の分析から, 共著, キリスト教文化研究所研究年報 53 (2020年3月下旬刊行予定), 2020. p37-59. (査読有) (本人執筆担当：第1章1節、第2章、第3章、4章)
- 6) 大井慈郎：郊外工場労働者の向都市移動と就業状態-インドネシア首都郊外工業団地周辺集落部アパート群調査より, 単著, 社会学年報 48, 2019. p163-174. (査読有)

【学会発表】

- 1) 清水哲郎：教育講演「地域の文化に配慮した高齢者のエンドオブライフ・ケア」, 日本老年看護学会第24回学術集会, 2019. 6. 7., 仙台市 (仙台国際センター) (招待)
- 2) 清水哲郎：シンポジスト・ミニレクチャ「ACP-意思決定支援をめぐって：患者がEOLディスカッションや予後についての話し合いを希望しない場合」, 第27回 日本乳癌学会学術総会 スポンサーシンポジウム「アドバンスケアプランニング」, 2019. 7. 11., 東京都新宿区 (京王プラザホテル) (招待)
- 3) 清水哲郎：特別講演「自分らしく生きる」を支えるケア -臨床死生学の視点から-, 第24回在宅ケア学会学術集会, 2019. 7. 28., 仙台市 (仙台国際センター) (招待)
- 4) 清水哲郎：教育講演「地域で暮らす」を実現する本人・家族の意思決定支援」, 北日本看護学会第24回学術集会, 2019. 9. 8., 盛岡市 (岩手保健医療大学) (招待)
- 5) 清水哲郎：特別倫理講演「厚生労働省プロセス・ガイドライン2018年改訂版とACP」, 日本ACP研究会第4回年次大会, 2019. 9. 15., 春日井市 (ホテルプラザ勝川) (招待)
- 6) 清水哲郎：シンポジスト提題「『ガイドライン2018改訂版』はどのような転換を推進するか」, 第43回日本死の臨床研究会年次大会 シンポジウム『「人生の最終段階における医療・ケアの決定プロセスに関するガイドライン」の意味とその応用：医療モデルから生活モデルへの転換』, 2019. 11. 4., 神戸市 (神戸国際展示場) (招待)
- 7) 清水哲郎：シンポジスト提題「意思決定支援の臨床倫理：ALS患者の侵襲的人工呼吸器選択をめぐって」, 第37回日本神経治療学会学術集会 シンポジウム「地域で支える神経難病診療体制の現状と展望：患者・家族の意思決定支援へのかかわり」, 2019. 11, 横浜市 (パシフィコ横浜) (招待)
- 8) 清水哲郎：シンポジスト提題「エンドオブライフ期の医療・ケアの臨床倫理」, 第31回日本生命倫理学会年次大会 学会企画シンポジウム「エンドオブライフ・ケアと人生の最終段階ガイドライン」, 2019. 12. 7., 仙台市 (東北大学川内南キャンパス)

- 9) 清水哲郎:シンポジスト提題「〈情報共有－合意モデル〉＝〈ACPモデル〉による意思決定支援の実現に向けて」,第31回日本生命倫理学会年次大会 公募シンポジウム「透析療法の意思決定支援のあり方－エンドオブライフ・ケアの論理と倫理」,2019.12.8.,仙台市(東北大学)
(査読有)
- 10) 相澤出:2019年6月1日,地元に掲げる一石としての「あんしんノート」－二ツ井ふくし会による在宅の看取りの事例集は地元になにをもたらすか?,日本文化人類学会第53回研究大会,2019.6.1.,東北大学(査読有)
- 11) 相澤出,2019年7月15日,二つのホームに拠る近代的個人たち－ミッション系女学校(女子大学)同窓生の戦後社会史,第66回東北社会学会大会.2019.7.15.,東北大学
- 12) 大井慈郎,木村雅史:地域差による介護予防事業の類型化－宮城県A市を事例に,第21回東北都市学会大会,2019.11.24.,秋田市民文化会館
- 13) 大井慈郎:首都郊外工場労働者研究の視座－ジャカルタ郊外住人の事例より,第37回日本都市社会学会大会,2019.9.5.,東洋大学(招待)
- 14) 大井慈郎:向都市移動における「人的つながり」の変化－インドネシア首都郊外工業団地周辺集落部アパート群調査より,第66回東北社会学会大会,2019.7.15.,東北大学

【その他】

- 1) 相澤出:2020,(書評)服部洋一著 生きられる死－米国ホスピスの実践とそこに埋め込まれた死生観の民族誌－(三元社、2018年),単著,保健医療社会学論集30(2),2020.p93-94.(招待)

以上

2019 年度 基礎看護学領域活動報告

1. 領域構成

菊池和子（教授）、竹本由香里（准教授）、作間弘美（助教）、成田真理子（助教）、川村直子（助手）、武田恵梨子（助手）

2. 基礎看護学領域における教育に関する内容と評価

開学3年目となり、1年生及び2年生の科目を担当した。看護学概論（菊池教授）、基礎看護援助論（菊池教授、竹本准教授）、看護理論（菊池教授）、ヘルスアセスメント、生活援助技術論、療養援助技術論、早期体験実習、生活援助実習は、領域内教員が分担・共同して講義・演習、実習を担当した。2年生前期の科目である看護過程論は領域内教員と他領域教員と共に担当した。通年科目としての基礎ゼミナールは、菊池教授が担当した。

基礎看護学で教授する科目は、看護学の基盤としての役割を担うため、学生のレディネスを把握し、各科目の教授内容について昨年度の授業評価を踏まえて教授した。

ヘルスアセスメントや療養援助技術論の授業では、“SCENARIO”を用いたシミュレーション教育を取り入れ、臨地に近い状況からのアセスメント能力の向上を図った。

早期体験実習および生活援助実習の準備・調整・実施・評価については、基礎看護学領域教員全員が担当し大きな問題なく遂行することができた。生活援助実習前のグループでの事例検討課題については授業の空コマに自主学習ができるよう、教員が実習室に待機し疑問点に答えるシステムをとり、自主学習内容を充実させた。また、個別で取り組む事例検討課題については一度グループで検討した課題について個別に整理したことで、昨年度より教育効果が上がったと思われる。

実習指導については、基礎看護学領域教員と、申請内容をふまえ学内の教員が担当した。来年度は、昨年度に引き続き学年も増えるため、実習と学内での授業が同時に実施されることから、実習担当教員の配置を見直し、計画する予定である。

これまでの課題として、1年時の前期演習科目のヘルスアセスメントが形態機能学と並行して教授するため形態機能学の理解がほとんど進んでない段階で、ヘルスアセスメントにおけるフィジカルアセスメントの理解に時間を要することが挙げられた。今年度も昨年度と同様に前期後半からヘルスアセスメントを開講し、事前課題として解剖生理学の課題を課し、学生の学習効果をあげるようし学生の理解度があがっている。

完成年度以降、開講時期を形態機能学終了後の1年後期に変更するよう改善が必要である。

実習時期に関しては、生活援助実習は、冬季でインフルエンザなどの感染症罹患のリスクが高いこと、悪天候の影響を受けやすいことなどをふまえて、より学生の体調管理の指導が重要である。

3. 基礎看護領域における研究に関する内容と評価

基礎看護学領域で作間助教を中心として取り組んでいる「自己調整学習過程における予見段階に着目した基礎看護技術の授業方略の検討」研究の一部を次年度に発表予定である。また、作間助教を中心として開催している実習施設の看護職者との研修会を4回行い、教員との共同研究発表にもつながった。

開学時から取り組んでいる学内プロジェクト研究に所属している教員は、共同の研究活動を行い、その成果を看護系学会学術集会で発表した。また、論文としてまとめ学会誌に掲載された。学内プロジェクト研究は次年度も継続して研究する予定であり、今後、学会発表及び論文としてまとめ公表する予定である。

その他、個人研究や他施設教員との共同研究で取り組んだ研究についても看護系学会学術集会で発表した。また、論文としてまとめ学会誌に掲載された。

基礎看護学領域は他領域に比較して、開学時から授業や実習に関わる比率が高く、教育に時間を多く要するなかでそれぞれが研究活動を行った。今後は今年度取り組んだ研究を含め、基礎看護学領域としての共同研究を推進すること、それぞれの教員がこれまでの研究成果を論文としてまとめるために努力していきたい。

今年度の研究業績は、以下のとおりである。

【論文】

- 1) 竹本由香里，大谷良子，作間弘美，遠藤芳子，江守陽子：東北地方にある A 大学看護学生の職業的アイデンティティと地元志向，北日本看護学会誌，22（1），21-29，2019.
- 2) 作間弘美，佐藤恵，成田真理子，竹本由香里，菊池和子：実習指導者とスタッフとの壁へのアプローチ—文献調査より—，第 50 回日本看護学会-看護教育-論文集，2019.
- 3) 高屋敷麻理子，菊池和子：外来化学療法を受けている切除不能膵臓がん患者の療養体験，岩手看護学会誌，13（2），27-40，2019.

【学会発表】

- 1) 作間弘美，佐藤恵，成田真理子，竹本由香里，菊池和子：実習指導者とスタッフとの壁へのアプローチ—文献調査より—，：第 50 回日本看護学会学術集会—看護教育—，2019 年 8 月，和歌山市.
- 2) 川村直子，佐々木真紀子：看護専門学校の新任期にある看護教員の主体的学習行動とその影響要因，第 50 回日本看護学会学術集会—看護教育—，2019 年 8 月，和歌山市.
- 3) 大谷良子，作間弘美，竹本由香里、江守陽子、遠藤芳子、青柳美樹、佐藤つかさ：岩手県に就業している看護職者の職業的アイデンティティと地元志向に関する実態調査，日本看護研究学会第 45 回学術集会，2019 年 8 月，大阪市
- 4) 作間弘美，大谷良子，竹本由香里，江守陽子，遠藤芳子，青柳美樹，佐藤つかさ：看護学生の職業的アイデンティティと地元志向に関する調査—ロールモデルと臨地実習達成感との関連—，第 22 回北日本看護学会学術集会，2019 年 9 月，盛岡市
- 5) 佐藤つかさ，青柳美樹，竹本由香里，大谷良子，作間弘美，江守陽子，遠藤芳子：看護学生の職業的アイデンティティと地元志向に関する調査—1,2 年次の縦断的变化と関連要因について—，第 22 回北日本看護学会学術集会，2019 年 9 月，盛岡市
- 6) 遠藤芳子，竹本由香里，佐藤つかさ，青柳美樹，大谷良子，作間弘美，江守陽子：A 県内で就職している看護職者の地元就職した理由の調査—看護学生を地元就業に繋げるために—，第 22 回北日本看護学会学術集会，2019 年 9 月，盛岡市
- 7) 曳地由紀子，作間弘美，佐藤恵：臨地実習における臨床指導者と看護学生の不安の関連

- 質問紙調査からみえた課題，第 22 回北日本看護学会学術集会，2019 年 9 月，盛岡市
- 8) 佐藤恵，成田真理子，石井真紀子，添田咲美，菊池和子，濱中喜代：看護学生の「ケア・スピリット」の認識—量的データの分析から—，第 22 回北日本看護学会学術集会，2019 年 9 月，盛岡市
 - 9) 石井真紀子，添田咲美，菊池和子，成田真理子，佐藤恵，濱中喜代：看護学生の「ケア・スピリット」の認識—質的データの分析から—，第 22 回北日本看護学会学術集会，2019 年 9 月，盛岡市

以上

2019 年度 成人看護学領域活動報告

1. 領域構成

土田幸子（准教授）、石井真紀子（講師）、齋藤史枝（助教）、大崎真（助手）、
添田咲美（助手）、佐藤大介（助手）

2. 成人看護学領域における教育に関する内容と評価

2019 年度に領域の教員が担当した科目は、成人看護学概論、成人看護援助論、生活習慣看護論、慢性期看護技術論、急性期看護技術論、がん看護論、成人看護学実習Ⅰ・Ⅱ、早期体験実習、生活援助実習、療養援助実習Ⅰ・Ⅱ、基礎ゼミナール、看護倫理、人間の生涯発達、看護過程論、エンドオブライフケア論の 17 科目であった。

1) 専門科目について

(1) 講義・演習について

3 年次は、「慢性期看護技術論」、「急性期看護技術論」、「がん看護論」が開講された。

慢性期看護技術論、急性期看護技術論、がん看護論それぞれの看護の対象をとらえ、看護の特徴に焦点を当てて展開した。また、3 年次の臨地実習にスムーズに連動できるよう授業の最終回には生活援助技術を組み入れた演習を展開し、基本技術の復習と健康障害のある対象の理解が深められるよう調整した。

2 年前期の成人看護援助論では、昨年度の反省から健康障害を有する対象への援助技術の習得に焦点を当て、成人期に多くみられる疾患と、主な検査と治療を教授した。

また、2 年後期の生活習慣看護論では、生活習慣と疾病の関連を理解し、成人期における人々の疾病予防と生活習慣の改善の重要性について考えることができていた。また、糖尿病で教育入院した紙上事例を用いた看護過程を展開することとしたが、学生のレディネスに対応した看護過程演習を実施することができ、後期の療養援助実習Ⅱに連動することができた。演習では、紙上事例に対するフットアセスメント、自己血糖測定、インスリン自己注射を各自で作成した手順をもとに実施した。手順の作成では、課題として提出時期を早めて、根拠が不明確な学生に対し個別指導を行った。当日使用する器具については初めて触れる学生が多く、実際の場面では器具の取り扱いに時間を要した。フットアセスメントでは、既修のフィジカルアセスメントの復習をしながら行い、フットケアの必要性を再認識することができた。

今年度の 1 年後期の「成人看護学概論」では、成人期の健康障害をグループワーク中心に展開し、生活や生活習慣と疾病の関連を理解することにつなげられるように考慮し、その後の生活援助実習でも活用することができていた。

「看護倫理」を石井が担当し、倫理を学ぶ意義や守秘義務、看護専門職の職業倫理などについて教授した。また、倫理的意味決定の事例検討を展開し、個人学習やグル

ープワークを支援し、発表の機会を設け成果を共有することで学修を深めた。

2 年前期「看護過程論」を齋藤が担当した。準備の段階から紙上事例の検討に加わり、演習で学生個人やグループの学修支援を行った。

(2) 実習科目について

1 年生の早期体験実習・生活援助実習を領域内の全教員が担当した。

2 年生では、療養援助実習Ⅰ・療養援助実習Ⅱを領域内の全教員が担当した。療養援助実習Ⅰについては、成人看護学領域が科目責任となり実習の準備から最終評価までの一連を担当した。この実習では、看護過程のプロセスを踏むことを目標としているが、特にアセスメントの段階に重点をおいて実施した。学生たちは担当教員からの助言を参考に、看護過程の看護計画をもとに実践するところまではほとんどの学生が体験でき、概ね実習目標を達成できたと考える。また、実習中の学修態度や実習記録への指導を要する学生があり、今後も継続して注視していく必要性を共有した。

3 年生には前期「成人看護学実習Ⅰ」、後期「成人看護学実習Ⅱ」を全教員で担当した。成人看護学実習Ⅰでは、これまでの臨地実習よりも看護度の高い患者を受持ち、看護の基本技術の向上と個別性のある看護の実践に重点をおいた。成人看護学実習Ⅱでは可能な限り周手術期や急性期にある患者を受けもち、変化に対応した看護の実践をめざして展開した。ほとんどの学生が学内では見られない積極性を発揮し、受持ち患者と良好な関係を築き、個別性のある看護を展開していた。しかし、若干名ではあるがアセスメント力に伸び悩みのある学生がおり、他領域と調整し指導の継続を共有した。

2) 基礎科目について

今年度は、基礎ゼミナールに土田がグループを担当した。PBL の基礎となる文献抄読や文献検索、討議、レポート作成、発表などを通して学生が主体的に学ぶための技術の修得を支援した。グループワークでディスカッションやプレゼンテーション能力の向上につながったと思うが、ディスカッションの深みと幅という点では浅く広くにとどまった印象があるものの、学生個々の学びという点では効果があったと考える。

石井が「人間の生涯発達」を担当した。成人期の発達の特徴と関連する理論について概説することで、学生にとって成人看護学概論の学修へとつながっていたと考える。

【著書】

- 1) 上谷いつ子、楠田美奈、佐野恵美香、柴崎初美、土田幸子、細谷美鈴、本田智子：病態を見抜き、看護にいかすバイタルサイン，照林社，令和元年 8 月

【学会発表】

- 1) 甲斐恭子・土田幸子・勝野とわ子・木内千晶・齋藤史枝：看護系大学教育における

タブレット端末利用状況向上に向けた基礎的研究－教員のタブレット端末活用状況の実態，日本看護学教育学会第29回学術集会（京都），令和元年9月．

- 2) 齋藤史枝、木内千晶、勝野とわ子、土田幸子、甲斐恭子：看護系大学生のタブレット端末の使用実態と活用向上に向けた課題，日本看護学教育学会第29回学術集会（京都），令和元年9月．
- 3) 佐藤恵・成田真理子・石井真紀子・添田咲美・菊池和子・濱中喜代：看護学生の「ケア・スピリット」の認識－量的データの分析から－，第22回北日本看護学会学術集会（盛岡），令和元年9月．
- 4) 石井真紀子・添田咲美・菊池和子・成田真理子・佐藤恵・濱中喜代：看護学生の「ケア・スピリット」の認識－質的データの分析から－，第22回北日本看護学会学術集会（盛岡），令和元年9月．

以上

2019 年度 老年看護学領域活動報告

1. 領域構成

勝野とわ子（教授）、木内千晶（准教授）、金谷優輝（助手）

2. 老年看護学領域における教育に関する内容と評価

1. 老年看護学領域科目

「老年看護学概論」は、1年生の後期に開講し、勝野教授が授業を担当した。本科目では、学生の高齢者観・倫理観を深化させるとともに加齢に関連する諸概念と理論を教授した。また、高齢者を身体的・心理的・社会的側面から総合的に理解し、高齢者の健康レベルに合わせた質の高い看護を提供するための基礎知識を教授するとともに、対象者の成長と発達のプロセス、人口統計および社会構造の変化、災害時のニーズ、高齢者への保健・医療・福祉サービスの現状と課題を教授し、老年看護実践における専門的な看護者の役割と機能を概観した。授業内容の工夫点として、心理的な介入方法としてのレミニッセンスプロジェクトを課し、学生の高齢者と看護に対する興味を育んだ。学生の取り組みの姿勢および達成度は高かった。

「老年看護援助論」は、2年前期に開講し、勝野教授、木内准教授が授業を担当した。ヘルスプロモーションの活動プランを演習に取り入れる工夫を行い、金谷助手もこの演習指導に加わった。この科目は、高齢者の生活を支える諸制度および社会資源、ヘルスプロモーションについて理解し、健康生活を支援する基礎的知識を修得する、また、認知症などについて理解を深め高齢者と介護家族に対する看護方法について基礎的能力を修得することを目的とした。学生の取り組みの姿勢および達成度も良好であった。

「老年看護技術論」は、2年後期に開講した演習を含んだ科目で、勝野教授、木内准教授、金谷助手が担当した。高齢者の残存機能を活かした生活援助技術、高齢者に対するヘルスアセスメント技術について、技術演習を通して実践に即した方法が修得できるよう物品を整備し授業展開の工夫を行った。

「老年看護学実習」は3年前期に行われた隣地実習である。盛岡市内の老人保健施設5施設と連携し、打ち合わせを密に行いながら計画的に事前準備を行った。さらに、学生が実習前にヘルスアセスメントや基礎看護技術の復習を行える機会を提供した。また、個々の学生の能力差に配慮し最適な環境下で実習できるように調整した。実習中は勝野教授が全病院の統括として担当教員と密に連絡を取り合うとともに、実習委員会委員長および学部長の指示のもと、スムーズに実習が進行するよう工夫した。2020年3月には、病気のために実習できなかった学生1名に対し追実習を行なった。

2. 看護専門科目、統合科目、その他の臨地実習

「看護研究方法論」は3年後期に開講し、勝野教授と大井講師が担当した。看護学における科学的研究の意義と専門職としての役割、研究のプロセス、質的・量的研究デザイン、データ収集法と分析方法、科学的論文のクリテイクについて演習と講義を用いて教授した。学生の取り組みの姿勢もよく、学生の達成度は高かった。

「看護過程論」「人間の生涯発達」は、1年の科目で木内准教授が担当した。「看護過程論」は関連図、看護問題の統合、全体像の描写、看護目標と計画の立案、実施、評価についての講義を担当した。授業の工夫としては、複数の担当教員と授業前から打合せを重ね、具体的な事例展開ができる内容となるようにした。「人間の生涯発達」は2コマを担当し老年期の発達理論、発達課題について講義した。老年期の発達における身体的、精神的、社会的特徴について諸理論を交えて教授し、生活援助実習で多くの学生が受け持つ高齢患者の理解につながる内容とした。

「療養援助実習Ⅱ」は2年の後期に行われた隣地実習である。実習責任領域として、勝野教授、木内准教授、金谷助手の協力体制のもと8実習病院と連携し、打ち合わせを密に行いながら計画的に事前準備を行った。さらに、担当教員と調整し学生が実習前にヘルスアセスメントや基礎看護技術の復習を行える機会を整備した。個々の学生の能力に配慮し最適な環境下で実習できるように調整した。また、実習中は勝野教授が全病院の統括として担当教員と密に連絡を取り合うとともに、実習委員会委員長および学部長の指示のもと、スムーズに実習が進行するよう工夫した。

1年の「早期体験実習」および「生活援助実習」、2年前期の「療養援助実習Ⅰ」を木内准教授と金谷助手が担当した。それぞれの実習において、臨床指導者との調整を行い、学生が実習目的を達成し、看護実践から学びが得られるよう支援した。

3. 老年看護学領域における研究に関する内容と評価

研究費の獲得については、勝野教授が分担研究者として科研基盤研究（C）を獲得し、長年取り組んでいる若年認知症家族介護者に関する研究を継続した。さらに、看護エキスパートによる若年認知症家族介護者支援についての研究成果を日本看護科学学会において発表を行った。木内准教授は、主任研究者として科研基盤研究（C）の2年目の研究活動を行った。その研究成果を日本看護科学学会およびEAFONS他国際学会で発表した。その他、勝野教授、木内准教授、金谷助手の3人は、学内プロジェクト研究メンバーとして、本学におけるタブレット端末利用状況向上に向けた取り組みをテーマにした基礎研究の成果を日本看護学教育学会で発表した。今後、さらなる研究活動の推進を図る予定である。

【著書】

- 1) 勝野とわ子：睡眠．真田弘美、正木治恵編、老年看護技術（改訂第3版）、南江堂、2020.
- 2) 勝野とわ子：不眠．真田弘美、正木治恵編、老年看護技術（改訂第3版）、南江堂、2020.
- 3) 勝野とわ子：看護研究のクリテイク．川村佐和子編、ナーシンググラフィカ基礎看護学④看護研究（3版）、2020.
- 4) 勝野とわ子：研究における倫理．川村佐和子編、ナーシンググラフィカ基礎看護学④看護研究（3版）、2020.
- 5) 勝野とわ子：高齢者へのヘルスアセスメント．松尾ミヨ子他編、ナーシンググラフィカ基礎看護学②ヘルスアセスメント（第5版）、2020.
- 6) 勝野とわ子：看護と人間尊重．志自岐康子他編、ナーシンググラフィカ基礎看護学③基礎看護技術（第6版）、2020.
- 7) 勝野とわ子：看護過程(Nursing Process)．志自岐康子他編、ナーシンググラフィカ基礎看護学①（第6版）、2020.
- 8) 勝野とわ子、菅野裕佳子：災害看護の基礎、志自岐康子他編、ナーシンググラフィカ基礎看護学①（第6版）、2020.

【論文】

- 1) Chiaki Kinouchi, Eiko Suzuki, Yuko Takayama, Mayumi Sato : Causal Model of Work Engagement among Registered Nurses and Licensed Practical Nurses Working in Long-Term Care Contexts in Japan, GSTF Journal of Nursing and Health Care, Vol4, No1,2019.

【学会発表】

- 1) 末永裕代、勝野とわ子：日本の地域在住高齢者の Frailty の特徴．第20回日本赤十字看護学会学術集会、2019年6月、東京都.
- 2) 齋藤史枝、木内千晶、勝野とわ子、土田幸子、甲斐恭子：看護系大学生のタブレット端末の使用実態と活用向上に向けた課題，日本看護学教育学会第29回学術集会、2019年7月、京都市.
- 3) 甲斐恭子、土田幸子、勝野とわ子、木内千晶、齋藤史枝：看護系大学教育におけるタブレット端末利用状況向上に向けた基礎的研究－教員のタブレット端末活用状況の実態－，日本看護学教育学会第29回学術集会、2019年7月、京都市.
- 4) 勝野とわ子、出貝裕子、青山美紀子、末永裕代、前田優貴乃、河原加代子：若年認知症者と介護家族を支えるケア～技術とそれを支えるもの～．第39回日本看護科学学会学術集会、2019年12月、金沢市.
- 5) Naoko Yamagishi, Towako Katsuno: Development of a person-centered care model for elderly patients with type 2 diabetes living alone. The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science, Osaka, Japan, February, 2020.

- 6) 木内千晶、鈴木英子、高山裕子、柴田滋子、小檜山敦子、松尾まき：.療養病床の管理職・非管理職におけるワーク・エンゲイジメントプロセスモデルの検証，日本看護科学学会 第39回日本看護科学学会学術集会，2019年11月，金沢市.
- 7) 松尾まき，鈴木英子，高山裕子，小檜山敦子，柴田滋子，木内千晶：看護職のワーク・ライフ・バランス調節力と首尾一貫感覚（SOC）が離職意向に与える影響，日本看護科学学会 第39回日本看護科学学会学術集会，2019年11月，金沢市.
- 8) 高山裕子、鈴木英子、木内千晶、松尾まき、小檜山敦子、柴田滋子：子育て中の女性看護師のメンタルヘルス：バーンアウトの影響要因－子育て時期の視点から－，日本看護科学学会 第39回日本看護科学学会学術集会，2019年11月，金沢市.
- 9) Yuko takayama, Eiko Suzuki, Maki Matsuo, Chiaki Kinouchi：Why Do Novice Nurses Burn Out Easily?, 23rd East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS) conference, January, 2020, Changmai, Thailand.

以上

2019 年度 母性看護学領域活動報告

1. 領域構成

江守陽子（教授）、大谷良子（助教）、佐藤恵（助教）

2. 母性看護学領域における教育に関する内容と評価

2019 年度は、1 年次科目の「基礎ゼミナール」（江守）「人間の生涯発達（2 コマ）」（江守）、2 年次科目の「看護過程論」（大谷・佐藤恵）を担当した。さらに、1・2 年生のアドバイザーとして看護専門基礎科目の学修や学生生活を支援した（江守・大谷）。

母性看護学領域に関する科目としては、2 年次学生対象に「母性看護学概論」（江守）、「母性看護援助論」（江守・大谷・佐藤恵）、を担当した。また、3 年次学生対象としては「母性看護技術論」（江守・大谷・佐藤恵）、「母性看護学実習」（江守・大谷・佐藤恵）、「セクシャルヘルス・アセスメント（選択科目）」（江守）を開講した。さらに、次年度に向け「総合実習」の施設開拓を行い、8 人分の実習施設を確保した。

次年度は全学年がそろい全科目の開講が予定されていることに含め、4 年生は本学初の看護師国家試験受験の年でもあることから、効率よくしかも母性看護学領域をはじめとする看護専門科目について、学生が興味を持って自らすすんで学ぶ意欲を高められるような授業と臨地での臨床教育を工夫し、提供する必要がある。

3. 母性看護学領域における研究に関する内容と評価

江守による 2019 年度科研費の継続研究：「育児期にある女性の社会経済的地位と健康関連 QOL および育児ストレスとの関係」については、分析を終え、2019 年 10 月に行われた第 60 回日本母性衛生学会学術集会において成果発表を行った。

また、大谷と佐藤恵もそれぞれが、2019 年度科研費助成事業の若手研究に採択されたことにより、飛躍的に研究を進展させる機会が保障された。

江守と大谷がともに参加する学内プロジェクト研究：「看護学生の職業的アイデンティティと地元志向に関する研究」では、看護学生アンケートの分析と看護職者対象のアンケートの分析について 4 件の学会発表と、1 年次学生の成果をまとめたものが北日本看護学会に研究報告として掲載された。学内プロジェクト研究については、さらなる研究の継続と進展を目指すことが確認されている。佐藤恵は、別の学内プロジェクト研究：「ケア・スピリットに関する研究」において、2 件の学会発表を行った。また、「看護実習指導者とスタッフとの関係」について学会発表を行い、そのうち 1 件を第 50 回日本看護学会論文集（看護教育）にまとめ掲載された。

さらに、佐藤恵、大谷、江守で行っている学内共同研究：「不妊治療後出産した女性の出産体験の受け止め」についての研究成果を、大谷が 2019 年 9 月に第 18 回日本生殖看護学会学術集会で、佐藤恵が 2020 年 3 月に第 34 回日本助産学会において口頭ならびにポスター発表を行った。

次年度以降も母性看護学領域として、教育・研究活動をますます発展・充実させる必要がある。

【論文】

- 1) 竹本由香里, 大谷良子, 作間弘美, 遠藤芳子, 江守陽子: 東北地方にある A 大学看護学生の職業的アイデンティティと地元志向, 北日本看護学会誌, 22 (1), 21-29, 2019.
- 2) 作間弘美, 佐藤恵, 成田真理子, 竹本由香里, 菊池和子: 実習指導者とスタッフとの壁へのアプローチ —文献調査より—, 第 50 回日本看護学会-看護教育-論文集, 2019.

【学会発表】

- 1) 佐藤恵, 大谷良子, 江守陽子: 不妊治療後出産した女性の次子不妊治療に対する気持ち, 第 34 回日本助産学会学術集会, 2020 年 3 月, 新潟市.
- 2) 川野亜津子, 江守陽子: 乳幼児を育てる母親の主観的幸福感の実態と育児ストレス, 精神健康度との関連, 第 60 回日本母性衛生学会学術集会, 2019 年 10 月, 浦安市.
- 3) 大谷良子, 佐藤恵, 江守陽子: 不妊治療後出産した女性の出産体験, 第 17 回日本生殖看護学会学術集会, 2019 年 9 月, 東京都中央区.
- 4) 作間弘美, 大谷良子, 竹本由香里, 江守陽子, 遠藤芳子, 青柳美樹, 佐藤つかさ: 看護学生の職業的アイデンティティと地元志向に関する調査 —ロールモデルと臨地実習達成感との関連—, 第 22 回北日本看護学会学術集会, 2019 年 9 月, 盛岡市.
- 5) 佐藤つかさ, 青柳美樹, 竹本由香里, 大谷良子, 作間弘美, 江守陽子, 遠藤芳子: 看護学生の職業的アイデンティティと地元志向に関する調査 —1, 2 年次の縦断的变化と関連要因について—, 第 22 回北日本看護学会学術集会, 2019 年 9 月, 盛岡市.
- 6) 佐藤恵, 成田真理子, 石井真紀子, 添田咲美, 菊池和子, 濱中喜代: 看護学生の「ケア・スピリット」の認識 —量的データの分析から—, 第 22 回北日本看護学会学術集会, 2019 年 9 月, 盛岡市.
- 7) 石井真紀子, 添田咲美, 菊池和子, 成田真理子, 佐藤恵, 濱中喜代: 看護学生の「ケア・スピリット」の認識 —質的データの分析から—, 第 22 回北日本看護学会学術集会, 2019 年 9 月, 盛岡市.
- 8) 曳地由紀子, 作間弘美, 佐藤恵: 臨地実習における臨床指導者と看護学生の不安の関連 —質問紙調査からみえた課題—, 第 22 回北日本看護学会学術集会, 2019 年 9 月, 盛岡市.

- 9) 遠藤芳子, 竹本由香里, 佐藤つかさ, 青柳美樹, 大谷良子, 作間弘美, 江守陽子 :
A県内で就業している看護職者の地元就職した理由の調査 —看護学生を地元就業に繋げるために—, 第22回北日本看護学会学術集会, 2019年9月, 盛岡市.
- 10) 大谷良子, 作間弘美, 竹本由香里, 江守陽子, 遠藤芳子, 青柳美樹, 佐藤つかさ :
岩手県に就業している看護職者の職業的アイデンティティと地元志向に関する実態調査, 第45回日本看護研究学会学術集会, 2019年8月, 大阪市.
- 11) 作間弘美, 佐藤恵, 成田真理子, 竹本由香里, 菊池和子 : 実習指導者とスタッフとの壁へのアプローチ —文献調査より—, 第50回日本看護学会-看護教育-学術集会, 2019年8月, 和歌山市.

【表彰】

- 1) 一般社団法人 日本私立看護系大学協会 2019年度看護学研究奨励賞
対象論文 : Megumi Sato, Mari Sato, Nobuko Oyamada, and Kineko Sato :
Development of a Japanese version of Salmon's Item List suitable for comparing satisfaction with childbirth experience between different modes of delivery, Journal of Japan Academy of Midwifery, 32(2), 113-124, 2018.
- 2) 一般社団法人 日本助産学会 第14回日本助産学会賞 学術賞 2019
対象論文 : Megumi Sato, Mari Sato, Nobuko Oyamada, and Kineko Sato :
Development of a Japanese version of Salmon's Item List suitable for comparing satisfaction with childbirth experience between different modes of delivery, Journal of Japan Academy of Midwifery, 32(2), 113-124, 2018.

以上

2019 年度 小児看護学領域活動報告

1. 領域構成

濱中喜代（教授）、遠藤芳子（教授）、甲斐恭子（助教）

2. 小児看護学領域における教育に関する内容と評価

2019 年度は、基礎ゼミナールを両教授が担当した。1 年生の学修態度や意欲及び到達レベルの確認に役立ったと考える。関連科目として、「人間の生涯発達」の科目を濱中教授が責任者として担当した。小児の発達段階、発達理論、各期の特徴について概説できた。その学びを踏まえて 2 年前期の小児看護学概論を展開した。後期には遠藤教授が小児看護援助論を担当した。3 年前期の小児看護技術論では実習前に必要な技術について短時間に演習を中心に展開した。実習に関しては、2 つの保育園と 2 つの県立病院で行った。夏休み中の実習等変則の期間の実習もあったが、概ね目標達成ができたと考える。また次年度の総合実習の実習場所の確保に向けて、病院施設との折衝し、具体的な学習内容についても検討した。次年度に向けての準備が整ったと考える。

3. 小児看護学領域における研究に関する内容と評価

2019 年度は、濱中教授が本学、清水哲郎教授代表の科研の分担研究者として、昨年度に引き続き、看護倫理教育に関して情報収集を行った。第 22 回北日本看護学会学術集会を学術集会長として本学で開催し、盛会裏に終えることができた。研究論文としては、育療に原著論文として投稿することができた。

遠藤教授は科学研究費助成事業における、基盤研究 (C) (代表者: 佐藤幸子 (山形大学)) では、共同研究者として研究論文を学会誌に投稿し掲載された。

そのほかに、メンバーが本学の 3 つのプロジェクト研究それぞれ担当し、データ分析等に取り組んでおり、濱中教授は「看護学生のケア・スピリットの認識に関する研究」(石井筆頭) の一部を北日本看護学会にて発表した。

遠藤教授は、「学生が地域志向性を持てるようなアイデンティティ形成のための教育方略に関する研究」(竹本筆頭) の一部を日本看護研究学会第 45 回学術集会にて発表 (大谷筆頭) した。それをまとめた論文を北日本看護学会誌に投稿する予定である。また、研究の一部 (遠藤筆頭) を第 22 回北日本看護学会学術集会で発表した。それをまとめた論文を北日本看護学会誌に投稿中である。その他 2 編 (佐藤つかさ筆頭) (作間弘美筆頭) を第 22 回北日本看護学会学術集会で発表した。

甲斐助教は、「タブレット端末を用いた教育方法に関する研究」の一部を日本看護学教育学会第 28 回学術集会にて発表した。また甲斐助教は、タブレット端末に関する研究は継続中で、その後の内容を日本看護教育学会第 29 回学術集会に演題登録しており、それらをま

とめたものを今後投稿する予定である。

総括として今年度は共同研究・科学研究費を中心に研究活動を推進できた。次年度以降はさらに向上的に取り組んでいきたい。

【論文】（全部査読あり）

- 1) 瀧田浩平、濱中喜代：知的障害が軽度な発達障害児の入院中の関わりに対する看護師の認識とその関連要因 育療 65 pp50-57 2020.3
- 2) 佐藤幸子（山形大学）、塩飽仁（東北大学）、遠藤芳子、今田志保（山形大学）：心身症・神経症児が困難と感じる「症状や受診に関連した学校場面」への対応方法. 北日本看護学会誌、第22巻2号 pp9-16 2020. 2.
- 3) 佐藤幸子（山形大学）、塩飽仁（東北大学）、遠藤芳子、今田志保（山形大学）：親の情動表出・特性不安と子供の情動調整および心身症状との関連. 北日本看護学会誌、第22巻1号 pp1-9 2019. 9.
- 4) 竹本由香里、大谷良子、作間弘美、遠藤芳子、江守陽子：東北地方にあるA大学看護学生の職業的アイデンティティと地元志向. 北日本看護学会誌、第22巻1号 pp21-28 2019.9.

【学会発表】（全部査読あり）

- 1) 佐藤恵、成田真理子、石井真紀子、添田咲美、菊池和子、濱中喜代：看護学生の「ケア・スピリット」の認識—量的データ分析から—第22回北日本看護学会学術集会講演集 p41、2019
- 2) 石井真紀子、添田咲美、菊池和子、成田真理子、佐藤恵、濱中喜代：看護学生の「ケア・スピリット」の認識—質的データ分析から—第22回北日本看護学会学術集会講演集 p42、2019
- 3) 大谷良子、作間弘美、竹本由香里、江守陽子、遠藤芳子、青柳美樹、佐藤つかさ：岩手県に就業している看護職者の職業的アイデンティティと地元志向に関する実態調査. 日本看護研究学会第45回学術集会 2019. 8.
- 4) 遠藤芳子、竹本由香里、佐藤つかさ、青柳美樹、大谷良子、作間弘美、江守陽子：A県内で就業している看護職者の地元就職した理由の調査—看護学生を地元就業に繋げるために—. 第22回北日本看護学会学術集会 2019. 9.
- 5) 佐藤つかさ 青柳美樹 竹本由香里 大谷良子 作間弘美 江守陽子 遠藤芳子：看護学生の職業的アイデンティティと地元志向に関する調査—1, 2年次の縦断的変化と関連要因について—. 第22回北日本看護学会学術集会 2019. 9.
- 6) 作間弘美、大谷良子、竹本由香里、江守陽子、遠藤芳子、青柳美樹、佐藤つかさ：看護学生の職業的アイデンティティと地元志向に関する調査—ロールモデルと臨地実習達成感との関連—. 第22回北日本看護学会学術集会 2019. 9.
- 7) 甲斐恭子、土田幸子、勝野とわ子、木内千晶、齋藤史枝：看護系大学教育における

タブレット端末利用状況向上に向けた基礎的研究－教員のタブレット端末活用状況の実態－、日本看護学教育学会第29回学術集会、2019

- 8) 齋藤史枝、木内千晶、勝野とわ子、土田幸子、甲斐恭子：看護系大学生のタブレット端末の使用実態と活用向上に向けた課題、日本看護学教育学会第29回学術集会、2019

以上

2019 年度 精神看護学領域報告

1. 領域構成

岡田 実（教授）、長南幸恵（講師）、佐藤つかさ（助手）

2. 精神看護学における教育に関する内容と評価

本年度より本領域に教授が着任し、分野内の講義・演習・領域別専門実習が滞りなく実施された。

岡田教授は、基礎科目では「基礎ゼミナール」「対人コミュニケーション」「人間関係」を専任で、「人間の生涯発達」をオムニバスで担当し、専門基礎科目では「メンタルヘルス論」を、専門科目では「精神看護学概論」をそれぞれ専任で担当した。「精神看護援助論」を長南講師・外部講師・岡田教授の3名で、「精神看護技術論」を長南講師と岡田教授の2名で、「精神看護実習」を長南講師・佐藤助手・岡田教授の3名でそれぞれ担当した。

専門領域別実習が期間を限定して集中的に実施されるため、長南講師や岡田教授が担当する講義の時間割と実習が重複することが多く、大幅な講義スケジュールの変更を余儀なくされた。なかでも長南講師は他に「早期体験」「療養実習Ⅰ」「看護過程論」と専門領域以外に担当する科目が多く、専門領域の講義や演習の運営に著しく支障をきたしている現状には改善を要する。

今年度から初めて専門実習が開始されるため、領域を構成する全教員が参加し事前の実習打ち合わせ会を実施（対象施設：盛岡市立病院、観山荘病院、せいわ病院）した。実習施設からは概ね了承が得られた。領域別専門実習の打ち合わせ後、4年時に行われる総合実習についても事前に打ち合わせを実施（対象施設：専門領域別実習の3病院に加え、花巻病院、本館病院（花巻市）、訪問看護ステーション・結の手）し、これも実習施設からは概ね了承が得られた。

計画された専門領域別実習は、事故もなく履修予定者61名全員が実習を終了した。評価A判定53名とB判定8名、C・Dの判定0名で、実習への遅刻や欠席もなく終了した。実習開始時には、受持ち患者とのコミュニケーションに戸惑いを感じ、精神症状や言動の意味を理解することに苦心していたが、援助関係の発展とともに患者理解を深められ、看護計画立案・実施・評価は、個人差はあるものの全員合格点に達することができた。実習生から実習の満足度調査を実施したところ、施設の実習指導者が学生の質問や疑問に丁寧に回答していたことで、より一層、実習への満足度が高まったとする回答が多く、概ね良好な実習環境であったことが窺われる。

専門領域別実習における看護過程展開の実施状況と多職種連携の観点からも、アセスメントの枠組みをゴードンから「生物・心理・社会の3軸によるアセスメント」に変更する必要性が認められた。については、新年度より「精神看護技術論」では新たなアセスメントの枠組みにしたがった看護過程の演習を行う予定である。

3. 精神看護学における研究に関する内容と評価

精神看護学領域では、構成員が自身の学術的な専門性を確立することを目標としている。

岡田教授は精神科看護師の良質な人材育成にシフトし、ICT(Zoom)を駆使したコストパフォーマンスの高い人材育成の実践を継続しながら、新年度からは新たに岩手県沿岸部に位置する医療機関看護部の人材育成に貢献すべく、ニーズ調査に基づく実践を開始する予定である。今年度は前任校で指導した修士論文の学会発表に参加した。

長南講師は教授が不在であった時分から領域を運営してきた事情もあり、この間、研究活動よりも専門領域の運営に力点が置かれてきた。完成年度を迎える新年度からは、継続中の科研費基盤研究 C に採択されている『ASD 児の各感覚の特性と生活の困難さに関する研究』の最終年度を迎えるにあたり、収集データの分析と解釈に取り組み中である。またこれまで発表してきた学術論文の研究成果と分析手法の独創性から、来年度開催の日本心理学会においてシンポジストとして招聘を受け準備中である。

佐藤助手は本格的な専門領域の運営に参加し、講義・演習・実習などに参加しながら自身の専門性を模索中である。今年度は本学の共同研究プロジェクトの課題に関する研究成果を学会発表した。新年度からは学位の取得を目指すことになる。

【学会発表】

- 1) 大蔵真理、岡田実：急性期状態にある統合失調症患者が隔離処遇中にたどった回復過程についての事例研究、第 27 回日本精神科救急学会学術総会、2019、仙台国際センター
- 2) 佐藤つかさ、青柳美樹、竹本由香里ら：看護学生の職業的アイデンティティと地元志向に関する調査－1, 2 年次の縦断的变化と関連要因について、第 22 回北日本看護学術集会、2019、岩手保健医療大学

以上

2019 年度 地域看護学領域活動報告

1. 領域構成

福島道子（教授）、青柳美樹（講師）、石田知世（助手）

2. 地域看護学領域における教育に関する内容と評価

1) 領域教員が担当した授業科目

領域教員が担当した授業科目は下記の通りであり、生活や環境、法制度と関連づけて健康を考えること、それらを基盤とした看護のあり方に焦点化して授業を展開した。

「ヘルスプロモーション論」は3年生前期に開講し、青柳・福島が担当した。本科目のねらいは、WHO が提唱するヘルスプロモーションの理解と、わが国のヘルスプロモーションに関連する法制度と地域看護活動を理解することであった。科目担当者として初めての開講であり試行錯誤の連続であったが、目標は概ね達成できた。学生の授業評価では「難しかった」等の意見も得ているため、次年度は学生の評価に応えるべく工夫していきたい。

「地域看護学概論」は3年生後期に開講し、福島・青柳が担当した。本科目のねらいは、後に続く地域看護学および公衆衛生看護学に関連する科目の基礎をつくることであった。目標は概ね達成できた。学生の授業評価では、「地域看護の視点の重要性を理解した」等の意見が寄せられた。

「地域看護援助論」は3年後期に開講し、福島・青柳が担当した。本科目のねらいは、地域看護のいわゆる「技術」といわれる家庭訪問、健康診査、健康相談、健康教育、グループ・組織化、地域アセスメントについて、地域看護実践に引きつけて理解することであった。演習時間の不足等の限界はあったが、目標は概ね達成できた。学生の授業評価では、「小テストが役立った」との意見があったので、他科目も含め今後も継続していきたい。

「保健医療福祉連携論」は在宅看護学関連の科目であり、3年後期に開講、福島が担当した。本科目のねらいは、在宅看護を展開するにあたって必須である多職種・多機関が連携して活動することについて、その意義、連携の要素・構造、連携の方法等について理解することであった。グループワークによる学修を取り入れ、目標は概ね達成できた。学生の授業評価では、グループワークに対する肯定的意見がある一方、資料が多過ぎる等の意見もあったため改善を目指したい。

以上の授業展開については、実習期間との関係から時間割がタイトとなり、かつ、科目展開の順序性にも問題が生じた。このことは、学生の授業評価においても指摘されており、次年度は可能な限り改善を目指したい。また、次年度は、加えて公衆衛生看護学の授業（技術論、管理論）が開始され、国際看護学、保健医療福祉行政論も担当していく。今年度に明らかとなった問題をふまえ、効果的な科目展開を計画しつつある。

2) 他領域の臨地実習等

「早期体験実習」では青柳・石田、療養援助実習Ⅰでは石田、療養援助実習Ⅱでは青柳・石田、生活援助実習では青柳・石田が担当した。各々の実習において目標達成のため、学生支援、学修環境の調整に努めた。また、石田は老年看護技術論に参加し、技術演習の成果に尽力した。

3) 地域看護学実習および公衆衛生看護学実習

2020年度は、地域看護学実習(4年生・必修)と公衆衛生看護学実習(4年生・選択)が行われる。これらの実習地開拓のため、昨年度から今年度にかけて岩手県内の全保健所と全市町村を訪問し交渉した。また、県保健福祉部医療政策室への相談、岩手県立大学・岩手医科大学と会合をもち、県内3看護系大学の実習期間、配置を調整した。さらに、産業看護の実習施設の開拓、盛岡市教育委員会と学校看護の実習学校の交渉を行った。

特に実習地として保健所・市町村を確保することは極めて困難であったが、保健師課程の公衆衛生看護学実習に関しては実習可能となった。

4)保健師課程履修生の選抜

4月に保健師課程履修者審査委員会を立ち上げ、ここに福島(委員長)・青柳・石田が加わった。委員会は3回開催され、その過程で選抜に至るスケジュール、選考基準、試験内容、申請書、問題作成依頼、判定案等を作成した。選抜試験は、10月12日(土)に実施し、結果は審査委員会、教学委員会を経て、11月20日(水)の教授会において決定された。選抜された履修生は20名であった。その後、履修生に対し、1月10日(金)に保健師課程履修者オリエンテーションを実施し、課程のスケジュール、カリキュラム、実習、国家試験等の概要を伝えた。

以上の企画・運営は比較的順当に行われたと考える。次年度も同様のスケジュールで進むことが考えられ、試験内容や諸様式の簡便化も検討していきたい。

3. 地域看護学領域における研究に関する内容と評価

当領域内の研究としては、石田を中心に「父親に焦点を当てた母子(親子)保健活動」の研究に向け、研究テーマと問題提起を明確にすべく文献検討をしてきた。看護学のみならず発達心理学や家族社会学等においても「父親」に関する研究は未だ十分ではなく、母子保健の制度政策・支援については実績のあるわが国においても未開拓テーマと考える。従来「母子保健」として「母一子」を中心にみてきた実践は「親子保健」にシフトしてきており、「父親」の研究は意義がある。当領域の研究活動としてじっくりと取り組みたい課題である。

青柳・福島・石田は学内共同研究「積雪寒冷地域における身体活動量、食生活、筋力、骨格筋量の季節変化」(代表:青柳美樹)に加わり、積雪寒冷地域であるX市の高齢者を対象にデータ収集した。結果は2報に分け、学内研究発表会にて発表する。

青柳は、学内プロジェクト研究「看護学生の地域志向性を高める教育方略の検討—岩手県内の看護学生と看護職者の職業的アイデンティティと地域志向の実態調査」に参加し、学会発表も行った。

【著書】

- 1) 岡庭豊, 中島茂, 福島道子, 他: 看護師・看護学生のためのレビューブック 2020, メデックメディア, 2019

【学会発表】

- 1) 青柳美樹, 高山裕子, 多賀昌江. 夫の海外赴任に同行した日本人配偶者のポジティブ思考を促す支援の試み—ワールド・カフェを実施して—. 第26回多文化間精神医学

会学術総会抄録集, p. 123, 2019

- 2) 多賀昌江, 青柳美樹, 高山裕子. 海外駐在員配偶者のストレス反応と関連要因の特徴. 感性フォーラム 2020 札幌, 2020
- 3) 大谷良子, 作間弘美, 竹本由香里, 江守陽子, 遠藤芳子, 青柳美樹, 佐藤つかさ: 岩手県に就業している看護職者の職業的アイデンティティと地元志向に関する実態調査. 第45回日本看護研究学雑誌, 42 (3), p. 429, 2019
- 4) 作間弘美, 大谷良子, 竹本由香里, 江守陽子, 遠藤芳子, 青柳美樹, 佐藤つかさ: 看護学生の職業的アイデンティティと地元志向に関する調査 ロールモデルと臨地実習達成感のとの関連. 北日本看護学会学術集会プログラム・抄録集, 22 回, p. 67, 2019
- 5) 佐藤つかさ, 青柳美樹, 竹本由香里, 大谷良子, 作間弘美, 江守陽子, 遠藤芳子: 看護学生の職業的アイデンティティと地元志向に関する調査 1,2年生の縦断的变化と関連要因について. 北日本看護学会学術集会プログラム・抄録集, 22 回, p. 68, 2019
- 6) 遠藤芳子, 竹本由香里, 佐藤つかさ, 青柳美樹, 大谷良子, 作間弘美, 江守陽子: A県内で就業している看護職者の地元就職した理由の調査 看護学生を地元就業に繋げるために. 北日本看護学会学術集会プログラム・抄録集, 22 回, p. 69, 2019

以上

2019 年度 在宅看護学領域活動報告

2. 領域構成

大越扶貴（教授）

2. 在宅看護学領域における教育に関する内容と評価

2019 年度は、1 年生の通年科目である基礎ゼミナール（基礎ゼミ）、3 年生を対象に在宅看護学概論、災害援助論、在宅看護援助論、エンドオブライフケア論（オムニバスで 2 コマ担当）を担当した。また、在宅看護実習における実習地開拓を行った。

基礎ゼミでは 1 年生 7 名を担当し、文献検索、グループディスカッション、インタビュー調査など、大学で学ぶための基本的スキルについて講義も交えながら進めた。在宅看護、災害看護に関わる科目では、講義中に講義内容を理解するための幾つかの発問をし、その問いに対する回答を記述させ、次の講義でフィードバックするということを重ね講義内容に対する理解促進を図った。エンドオブライフケア論はオムニバス型講義であったため、授業全体としての目的や系統的な論理の組み立てが希薄になったのではないかと感じた。次年度は担当教員間の目的の共有などを図り授業の改善を図りたい。

在宅看護実習においては、実習地が絶対的不足状態であり、学習の保障に対する危機感からあらゆる手段を講じ確保を図った。

3. 在宅看護学領域における研究に関する内容と評価

2019 年度は、科学研究費助成事業基盤（C）「高齢者虐待対応における息子・娘介護者の続柄や性差を考慮した支援・介入技術の開発」（2 年目）の主研究者として、息子・娘介護者のインタビュー調査を実施した。また、基盤（B）「在宅生活ニーズ把握を目的とした多職種連携のための見取り図活用方法の開発」（最終年度）の分担研究者として、ヒアリング調査、研究報告会などを実施し、学会発表を行った。

大学内の共同研究「大学基礎教育における災害復興支援に関する研究」では、分担研究者として被災地復興支援の取り組みの情報収集を行った。個人研究として外国人の介護問題を進める予定であったが文献収集に留まった。今年度は教育環境を整えることや大学運営に比重を置かざるを得なかったため、研究活動に時間を割くことは困難であった。次年度は、教育・研究・大学運営・社会貢献のバランスを図りながら研究活動の充実を図っていく。

【学会発表】

- 1) 浦橋久美子、工藤恵子、鈴木 晃、大越扶貴、阪東美智子、高橋郁子、猪股久美、網野寛子：見取り図を用いた在宅生活アセスメント：市町村 保健師の見取り図活用の実態，第 78 回日本公衆衛生学会総会抄録集 P433，2019
- 2) 工藤恵子、鈴木 晃、大越扶貴、浦橋久美子、阪東美智子、高橋郁子、猪股久美、網野寛子：見取り図を用いた在宅生活アセスメント，第 78 回日本公衆衛生学会総会抄録集 P433，2019

以上

外部資金獲得状況

外部資金獲得状況一覧

清水哲郎 (一般教養：教授)

1) 基盤研究(A)(代表)

課題番号：18H03572

研究課題名：臨床倫理システムの哲学的展開と超高齢社会への貢献および医療者養成課程への組み込み

濱中喜代 (小児看護学：教授)

1) 基盤研究(A)(分担)

課題番号：18H03572

研究課題名：臨床倫理システムの哲学的展開と超高齢社会への貢献および医療者養成課程への組み込み

江守陽子 (母性看護学：教授)

1) 基盤研究(C)(代表)

課題番号：17K12284

研究課題名：育児期にある女性の社会経済的地位と健康関連 QOL および育児ストレスとの関係

遠藤芳子 (小児看護学：教授)

1) 基盤研究(C)(分担)

課題番号：16K12134

研究課題名：心身症・神経症児のための動画によるソーシャルスキルトレーニングツールの開発

勝野とわ子 (老年看護学：教授)

1) 基盤研究(C)(分担)

課題番号：19K10991

研究課題名：若年認知症家族介護者の健康問題の「見える化」による支援システムの構築

大越扶貴 (在宅看護学：教授)

1) 基盤研究(C)

課題番号：18K10577

研究課題名：高齢者虐待対応における息子・娘介護者の続柄や性差を考慮した支援・介入技術の開発

2) 基盤研究(B)

課題番号：17H04472

研究課題名：在宅生活ニーズ支援を目的とした多職種連携のための見取り図活用方法の開発

木内千晶 (老年看護学：准教授)

1) 若手研究(代表)

課題番号：18K17616

研究課題名：高齢者施設の看護職のワーク・エンゲイジメント因果モデルの検証

大井慈郎 (一般教養：特任講師)

1) 若手研究(B)(代表)

課題番号：17K13838

研究課題名：東南アジア都市における工業団地労働者の地域・階層移動研究

2) 基盤研究(B)(分担)

課題番号：16H03319

研究課題名：インドネシアにおける日系工業団地進出と地域社会変容に関する研究

青柳美樹 (地域看護学：講師)

1) 基盤研究(C)(代表)

課題番号：16K12314

課題研究名：海外派遣労働者の配偶者における生活適応状況の特徴の明確化とコミュニティ支援の検討

1) 基盤研究(C)(代表)

課題番号：19K11200

課題研究名：渡航看護のコンピテンシー・モデルの開発と渡航看護認識向上プログラムの検討

長南幸恵 (精神看護学：講師)

1) 基盤研究(C)(代表)

課題番号：16K12158

研究課題名：ASD 児の各感覚の特性と生活の困難さに関する研究

相澤出 (一般教養：講師)

1) 基盤研究(A)(分担)

課題番号：18H03572

研究課題名：臨床倫理システムの哲学的展開と超高齢社会への貢献および医療者養成課程への組み込み

大谷良子 (母性看護学：助教)

1) 若手研究(代表)

課題番号：19K19685

研究課題名：体外受精により妊娠した女性の妊娠・出産体験のとらえ方に関する研究

佐藤恵 (母性看護学：助教)

1) 若手研究(代表)

課題番号：19K19650

研究課題名：分娩様式を問わない出産体験評価尺度の実用化にむけた検討

石田知世 (地域看護学：助手)

1) 基盤研究(C)(分担)

課題番号：19K11200

課題研究名：渡航看護のコンピテンシー・モデルの開発と渡航看護認識向上プログラムの検討

以上